

心の目で見える環境問題

吉増 克實

通勤電車の窓の向こうに果てしなく広がる家々の屋根の上の、鳥の影一つない空を見ながら、この空の下には虫も獣も住んでいない、人間だけが、それもおびただしい数の人間だけが（自分もむろんその一人なのですが）住んでいるのだと思いついて、何か空恐ろしい気持ちになったことがあります。かつては同じ空に様々の鳥の群が舞

い、その下に広がる原生林や草原に数知れぬ虫や獣たちが群れ集っていたであろう光景を思い浮かべて、失われたものの大きさに啞然とするような気持ちに襲われていたのでした。

クライブ・ポントニングの『緑の世界史（上・下）』（朝日出版社）をおすすめしたいと思うのはそんな気持ちと関係しています。数年前、本屋で

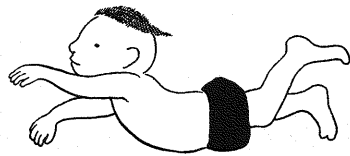
たまたま目に留め、名前に惹かれるままに買ったのですが、上下二巻の大部のため読むのは後回しにして過ごしていました。昨年、どんなきっかけであったか忘れましたが読み始めたところ、期待以上の内容に驚きました。環境問題を、人類と地球との関わり合いの歴史という観点から該博な知識をもとに見通しよく示してくれています。環境問題にはすでに長い人類史的背景があること、むしろ人類史はそのまま環境破壊の歴史でもあると
言うことのようにです。

さて、『緑の世界史』には政治的事件も戦争のこともひとつも述べられませんし、いわゆる歴史的な重要人物の一人も登場しません。ここに描かれるのは、次第に増加する人間たちが生きるために地球を自分たちの都合のいいように変えようと
し、その結果それを破壊してきた歴史です。約二百万年前にアフリカの一隅で生まれた現在の人類

の直接の先祖たちが様々な困難を乗り越えながら約一万年前までに全地球上へ広がりました。人類史の九九パーセントを占めるこの時期人間は狩猟採集生活を送っていましたが、それは思いがけず

豊かな生活であり、短時間の労働を除いて大部分の時間は遊びと祭祀に使われていたそうです。この再生可能な資源による環境との調和的な生活の間にも、人間はいく先々で狩猟生活を通じて多くの大型ほ乳類をはじめとする動物たちを絶滅させていったようです。

そして一万年前に最初の大変化として農耕と定住生活が始まりますが、それは環境の再生可能性を越えて行われた森林破壊と土壌の喪失の過程で



した。古代文明を滅ぼしたものは、戦争よりも文明の発展そのものが引き起こした環境破壊による自滅であり、われわれが現在自然な景観と見ているものは、むしろ失われた原生林の跡なのです。

しかしこの二百年に起こった工業化は過去のどのような変化にまして地球環境を激変させ、地球温暖化やオゾン層の破壊など地球規模でわれわれの生存を脅かす事態まで引き起こしています。文明の進歩とは、増大する人口を養うためにより困難な技術を用い、より多くの時間と労力をかけて生産活動を行わなければいけなくなる過程であり、いまやいずれ枯渇する再生不可能な化石燃料をひたすら消費しつづけているのです。幸福を求めてより一層苦しい努力へと追い立てられ、その努力の結果が破滅であることが分かっているのに止めることもできないという状況は、麻薬におぼれた人々の行動を思い出させます。人類の繁栄、

二百万年続いた狩猟採集生活の最後の時期に地球上の人類は四百万人（！）だったものが、農耕生活が始まって一万年後二億人に、それがこの二百年で六十億人に増えてさらに毎年数千万人ずつ増え続けているという事実が、地球に起こっている変化の異常性とわれわれの直面する現在の危機的状況を示してくれるのではないのでしょうか。

『緑の世界史』の第一章はイースター島の教訓と題されています。そこには孤立した島での文明の興隆と環境破壊の結果起こった突然の没落と原始生活への退行が描かれています。そしてイースター島の人々は、そこで起こりつつあることを知りつつ、それが枯渇するまでついに破壊をやめることができなかつたのです。それは地球という孤立した宇宙の島にすむ現在のわれわれの姿を象徴しているかも知れません。

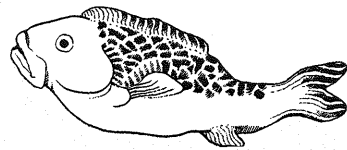
『緑の世界史』の訳者でもある石弘之氏自身の著

作『地球環境報告Ⅱ』（岩波新書）は猖獗を極める大規模な環境破壊の現況報告です。上流の灌漑のために河口から七百キロにわたって干上がった黄河の流れ、あるいは同様の農業開発のために干上がり世界地図に見る湖の形まで変化したアラル海の姿など読むにつけても慄然とせざるをえません。

ドイツの哲学者ルードヴィッヒ・クラージェスは『人間と大地』（うぶすな書院）に収められた一九一三年の講演「人間と大地（地球）」の中ですでに「進歩」の名の下に行われている森林破壊、河川の汚染、動物種の絶滅など地球の破壊を描きつつ、それが心を見失い支配欲に憑かれた人間の仕業であることを述べています。大気にせよ、水にせよ、われわれは地球環境に完全に依存して生活しています。それらはそれなしには一瞬の生存すら不可能なものです。われわれと地球との関係

は生まれたばかりの赤ん坊と母親との関係とまさに同じです。クラージェスはむしろ個々の母は地球という偉大な母の分身であると述べています。われわれ人類は他の生き物共々地球の一部でありその子どもなのです。環境

破壊とはこころを見失い母なる地球との絆を見失った人類という子どもたちの暴走であるとすれば、環境問題とはわれわれの心の問題に他なりません。クラージェスと同じようにポンティンゲも『緑の世界史』の中で、ヨーロッパ人による世界支配の過程でひき起こされた南北アメリカ、太平洋、オーストラリアなどでの、大地の子と云うべき先住民族への虐待をも取り上げていることに、



そのことがよく示されています。環境問題から心の問題へ、緑蔭図書のテーマとして取り組んでい

ただけると幸いです。

(精神科医)

つながりが見えてくる時

永倉みゆき

小学校に勤めていた時、四年生の子ども達と水をめぐる学習をした事がある。雨が地面に降り川に流れ込み海に至り、また再び蒸発するという循

環の中で、水が、木々を潤し動物を育て、様々に形を変えてあらゆる生命を支えているということ。を改めて知らされた。そしてその同じ水が、私達